

特別寄稿

大学評価報告書 — 誰が、何を読む。ならばどう書く —

岩手大学 評価室
教授 大川 一 毅

大学の評価担当チームにとって、評価報告書（自己評価書）の作成は重要な仕事です。多大な時間と労力を費やしてまとめるこの一冊。誰が、何を読むのでしょうか。

評価報告書の読者として、まず想定するのが提出先の評価担当者です。このうち「同僚評価（ピアレビュー）」を担う方々は大学評価のスペシャリストではありません。ですから評価報告書を読む作業には相当の献身的努力と忍耐力が必要とか。なぜなら「報告書の内容がスッと頭に入らない」し、「読んでいて楽しくない」からだそうです。せっかく大学でいい取り組みをしているのに、それを相手に伝えられなければ報告書失格です。ならばどう書きましょうか。

評価報告書には書き方の基本があります。評価項目について「どのような目的で何を行い、いかなる成果をあげたのか。そして改善課題は何か」をデータや根拠資料を添え、指定された文字数で簡潔明快に示します。これがなかなか難儀です。他大学の報告書や自学の報告案を読んでいて、突如とんちんかんな内容や強引なロジックで押し切る文章に出くわしたことはありませんか。そうした箇所は「訳あり」です。取り組みがうまくいっていれば、報告文章も単純明快です。取り組みや成果がないと、ともかく何か事例を引っ張ってきて無理矢理つなげて話を作る。それが「難読箇所」になっていきます。そんなこと、評価担当者はお見通しかもしれません。

制限文字数に収めるため表枠掲載も多用します。その結果「何々は表○の通りである」の文章ばかりが氾濫する報告書を散見します。主語も接続語も省略し、結局、文意や文脈が不明瞭となった文章も少なくありません。「何のため、誰（どこ）が、何して、どうなった」、「目的に照らし、何が、こうだから、どうなんだ」。これに留意して作文するだけで報告内容がはっきりしてきます。章や観点ごとで筆致が頻繁に変わるのも読み手にはストレスです。素案が出来たら評価チーム員複数の視点で読み合わせ、文体を整える作業も大切です。評価報告書を読んで楽しくないのは、そこに学生・教職員の笑顔や努力する姿が見えてこないからかもしれません。報告書に大学の「息吹」を与えることも評価チームの大切な役目です。

評価報告書の「読者」には、他大学の評価チームもいます。特に熱心に読むのは報告書作成中の大学か、それとも競合(ライバル)大学の評価メンバーです。「ここはどう書くの?」と思えば、即座に他大学の報告書を参照します。ライバル大学の報告書には参考となる記載や資料が満載で、本当に頼りになります。もちろん、自学の皆さんも是非に報告書を活用していただきたい。外部資金申請書の作成にも、大学の年史編纂にも、現有課題の把握や大学戦略の策定にも、かなり使える「虎の巻」です。わかりやすく役に立ち、読んで楽しい評価報告書。全国大学・評価チームの皆様、ともに切磋琢磨いたしましょう！